女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾五號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雑 女
The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

No. 175. August 17th, 1889.　　第百七十五號目錄

EDITORIAL:— To the Departed Spirits of the Meiji Girl-students.
LEADING ARTICLE:— English Puritans.
CRITICAL NOTES:—"Life of Edmund Burke." "Bijigaku" (A Rhetoric). Three New Magazines.
MISCELLANEOUS:— The Grave-digger. "The Full Moon" (A Poem). Why should the Moon of "Obasute" be Prefered to any other? Domestic Economy. A Chance-thought. A Summer Dawn. Literary Rivalry.
DROLLERY.
CHILDREN'S COLUMN.
HISTORICAL RECREATIONS: — Charles Dickens (II.)
NOVEL:—"Heart and Mind."
GENERAL NEWS.

社說　明治女學生の亡魂を慰む
論說　英國のピューリタン（櫻田優香里）
批評　エドモンド、ボルグの傳を讀む（叢菊野史）○美辭學（撫象子）○樂雅記第一號○明治美術會報告第一回○光第二號
雜錄　墓を掘るもの（一のぶ）○宗祇名月の瞑冥の發句○古今文學の相違○古人の名に恐ろく勿れ○月は月なり○姨捨のみを賞でんや（ふ、ち）○細君經濟學（山下石翁）○いざよひの遊（みなせ）
笑草　やるまいぞ酒の相手○鉢の木○花より月見○意見の金が三百兩○都人も在五中將
兒籃　わろだくみ（終り）
史傳　チャーレス、ディッケンス傳（第二）
小說　冷熱記第二章（国怨）
閑書　藤の屋大人に參らす（思案外史）
新報　國際結婚論○女流の結婚○一夫一婦制建白○關西教育協會○濟々黌女子部○現今日本國裏禁酒會○獨逸國女學○女子の眞勇○教授ミッチェル女史逝く
外報　米國土人○女大學校長
新報　女子職業學校○園權典侍○內外人結婚

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Miss Shige Kushida who has sometime been in San Francisco, is to enter Richmond College through the recommendation of Miss Willard.*

(2) *The Keizai Zasshi has an article on the Inter-marriage of nations, advocating it on three grounds: 1. It will prevent evils arising from the Royal line marrying among subjects. 2. The Royal line will be maintained in its rank and dignity. 3. It will cement the relations between nations.*

(3) *There are fifty-four Temperance Societies in the Empire.*

(4) *T[illegible] K[illegible] n[illegible] school [illegible] "Seisyi Kō," whose object is to encourage the [illegible] spirit in the youths, after the [illegible] education. Last year [illegible] girls, instructing them [illegible] of Spartan mothers [illegible] of its kind.*

誌 學

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十五號
明治二十二年八月十七日發兌

社說

○明治女學生の亡魂を慰さむ。

嘗ら覆ひ草茂る處ろ古墳累々として立つ、墓石に苔生じて文字明らかならず、村人の時々往來するものも弔らふとなし、試みに問ふ彼の土中に葬られたるは何人にてありしぞ。或は紅顔の少年志未だ成らず忽まち碎けたるにあらずや、或は妙齡の淑女婚尙ほ果らず俄かに失せたるにあらずや、或は純德の莊屋利民の策遂に奏功せず悲しみて亡びたるにあらずや、或は老夫妻愛兒を失なひ痛憂去るに堪へず相尋いで死せしにあらずや。虫の吟ずるに問ば依然として啣々たり、草の動くに問ば靡然として點頭づくのみ、嗚呼此れ何人の墳墓ぞや。吾人固より知らず、然れども百戸の村未だ起たざるのハムプデンあり、未だ出でざるの孔明なきにしもあらず、彼等は或は書を讀み、計ごとを立て丶志を懷きたるともありしならん、左れど此等の者は彼等が現われざると共に現われず、空しく死して其肉と共に土化し去りたるならん。吾人之を思ふときは、地上の人類は其數地下に葬られたるの人に及ばざるともあらん、地上に名を殘したるの英雄は無名豪傑の地中に埋沒したるより少なきともあらん、古今東西の活歷史は彼の混然索然として存するの塵土に陰に骨文字を跡づけたるに及ばざるともあらん。然らば則はち內閣の貴顯何をか誇り、茅屋の英雄何をか怨み、英才を死したる敎師何をか悲しみ、俊兒を失なひたる父母何をか歎く、草木は森々として茂る、然れども之を養ふの土地には更に倍多の草木あり、星辰は閃々として輝る、然れども之を現わすの天奧には更に多數の星辰あるべし。總べて其表ては一平面にして、其背ろ多層の裏あるもの也。

然りと云へども、世間もし悲しむべきとありとせば、彼の英才の夭折し將に高からんとするもの丶頓かに碎かれたるより悲しきはなし。花の開くや多くの辛苦を經過したるものなり、彼の英才は人間の花の如し、遺傳によりて深く培われ、敎育によりて切に養われ、風雨辛酸に堪へて漸やく蕾を破らんとするに至れるもの也、然るに俄然魔風來りて之を落す。嗚呼、バーンスの死せしはピラミッドの倒たるよりも愕痛すべし、パスカルの死せしは富士山の崩たるよりも痛恨すべし、ピットの死せしは理想共和國の成ざるよりも慨歎すべし。英才の夭折は甚いだ悲しきと也、然りと云へども其夭折する

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

や寧ろ命と云ふべし、命によりて其死するは尙ほ少さか慰さむる所ろあり、人爲の亂暴壓制によりて之を殺し、たとひ其肉を殺ろさゞるも其才を壓して彼が精神を殺ろさば、天下の悲しきと之に過ぎたるはあらじ、世人英才の少くして死し墓に入るを慨す、然れども其の殺ろされて老ひ遂に世に出でざるを歎ぜず。

英才の肉未だ死せずして其神すでに殺ろされたるもの極めて多し。請ふ見よ、先づ他に導びかれて惡しくなるもの抑そも幾千ぞや、たとひ未だ導びかるゝ程の甚しきに至らずとするも、其の他に妨たげられて進まざるもの抑そも幾千ぞや、而して導びかるゝとなく、妨たげらるゝとなきものと云へども、亦其用才の所を奪われて進步せざるもの抑も幾千ぞや。

進化論に云く、尤も進みたるものは尤も破れ易しと、蓋し凡通尋常の者は數百千年の習慣によりて固まり、其の成立つや至つて丈夫なり、然れども彼の尤も進みたるものは其の成れる尤も新らしきものにして、習慣の養ひを得たるとの亦尤とも薄きもの也、之を以て其の一朝退化碎破の方向に向ふときは其の破碎し去り退化し去るとも亦た尤も速かなるもの也。

彼の英才は即ち人智の尤も進みたるものにして、其進步に多くの望みを有すると共に、其の墜落にも亦た多くの掛念を掛くるもの也、此を以て神童化して才子となり才子化して豪傑となり豪傑化して一世の大支配者となると固より多しと云へども、然れども亦た神童漸やく凡了して遂に尋常普通の人となるもの頗ぶる多し、之を上に導びくものは其敎師の導びきなり、之を下に落すものは惡友人の誘なひなり。英才の才固より凡人に超へたり、然れども其未だ熟せざるに當つては之を破ぶると決して難しとなさず、狗犬よく虎兒を嚙み、燕雀尙ほ鳳卵を碎く、如此く英才の惡人に化せらるゝと亦容易ならざるにあらず。此の故に崑岡偶たま昌石を產し切瑳琢磨以後の望み甚はだ高大なるに拘らず、土之に混じ、塵之を被ひ、遂に彼の明光々を沒して美質を發揮せしめざるとあり。

英才の如此にして中絶する實に悲しむべきにあらずや、凡そ親切に子を育てたる父母は皆な此の悲しみを知らん、熱心に子弟を敎へたる敎師は皆な此の悲しみを知らん、安んぞ苗の早倒し、庭木の挫折し、晴天の乍まち陰雨するを悲しむの比ならんや。

然りと云へども導びかれて惡しくなるものは尙ほ其人の弱きなり、何んぞ必らずしも他を怨みんや、但だ夫れ德營の志想

常に鬱勃し、高く〳〵進步せんとするの決心斷えず確立するに拘らず、身外の萬物悉とく之に逆らひ、故障防害を伴なひ來り難苦相連なり敵するの日に當りて、或は能く之に堪へ、遂に全勝し、雲霧を排して快よく背後の太陽を見るの偉人亦た少なからずと云へども、不幸にして之が爲若し中折するものあらば豈亦た悲しきことにあらずや。而して其の之に逆ふもの、若し天命自然に出づるときは吾人尙ほ之を怨みとせじ、然れども若し彼の人間の亂暴我儘なるに發し、世間の習俗の勝手不自由なるに發するあらば何如ん、吾人が此の中折したる英才の爲めに歎くや實に極切ならざるを得ざる也。試みにビクトルユウゴの小說を一誦し、擅制なる政治の下に何如に靈能の自由に伸びざるかを見よ、其の意思必らずしも弱きにあらず、其憤發必らずしも足らざるに非ず、其盡力必らずしも至らざるに非ず、然れども若し卑屈の爲に接吻到り、剛英の上に鐵拳落つるの日に於ては、如此き意思憤發盡力は偶たま以て不幸災害を買ふの媒に過ぎず、悲しひ哉俊才の胸悉とく叩かれ、人傑徒らに厄難を冠むてつ沒す。故に壓制の世間は重き蓋の如し、之に添着するものは或は高めらるゝとあるべし、之を衝くものは彌よ壓迫せられざるとなし、如此き時に於て英才の挫折するを見る、豈に痛絶の事にあらずや。

然りと云へども、他に妨たげらるゝは尙ほ之を破るを得べし、之を破ぶるはいよ〳〵英才の爲に其英氣を增す也、若し艱難によりて玉となり、辛苦によりて人物の生ずるを知らば、他の壓制束縛は未だ必らずしも悉とく嫌ふべきにあらず、但だ夫れ百千年の習慣濛々濃々として塡密し、世上未だ光りある間隙なくして彼の暗黑裏に新空氣を吹入するの餘地存せざるに當りては、何如なる英才ありと云へども只滿腹便々として空しく廢死せざる可らず、吾人史を讀むに戰國に哲學者あり、亂世に聖人あり、太平の天下切りに攻伐論を弄して漸やく慰さむるものあり、彼等は皆な一世の英傑よして遂に世に合わざりしものなり、髀肉徒らに生じ、筆端暴りに風雲を起し、聖坐彈丸に破らるゝの歎あり、而して彼等皆な不平を懷いて死せり、豈に只だ不平なるのみならんや、一世は甚く之を惡み、遂に之を世賊となして迫害するに至る、彼等が不幸實に慷歎すべし、吾人豈に之が爲めに悲しまざるを得んや。

左れば少年の墓に泣くものは須らく少年の惑わさるゝに泣くべし、英才の夭折するに泣ものは須らく英才の生ながら死せるに泣くべし、豈啻だ累々たる古墳のみ彼等が墳墓ならんや、

彼の讀れざるの高論も、用ひられざるの妙計も、出でがたきの伏龍窟も、亦皆な彼等が爲めの墳墓にあらずや、吾人は有爲の人の死せしに泣く、然れども其尙ほ生ながら死するもの、死しつゝ成佛せざるものに至りては、吾人實に慟哭痛歎するも尙ほ堪へざる也。

世人果して同じく慟哭痛歎するか、然らば則はち今の明治女學生の爲めに深く泣くべき也、世人果して泣き且つ成佛せざるものを弔はんとする乎、然らば則はち吾人と共に謹しみて今の明治女學生の亡靈を慰さむべし。

嗚呼今の高等なる女學生は英才の實に中挫し、夭折し、廢絶するものにあらずして何にぞ。彼等は卓絶したる教育を受けたり、天保老人は娘に女大學を教へ、保守教育家は餘計なる女學論を研窮する中ち、既に幾多の高等女學生卒業したり、英文を流讀するもの固より多し、獨逸語佛蘭西語を兼ぬるもの決して少なしとせず、而して其識見は漸ろく〴〵高尙となれり、男子は世の事を思ひ煩ふ中ち彼等は高く天の事を思へり、男子は放蕩遊興する中ち彼等は深く靈魂を養なへり、男子は富貴利達に奔走する中ち彼等は犠牲獻身の道を進めり、如此く彼等は高尙に熱心に實際に働かんとせり、然れども世は未だ彼等をして自由に運動せしめず、父兄或は之を縛り、習慣或は之を縛り、乍まち彼等をして其の雄志を挫かしめんと爲す。實に彼等は世に用ひらるゝの地を得ず、當に用ひられざるのみならず、數多の妨害を受け、鬱々昏睡して頗ぶる活潑なるを得ず、此時に當りて男子は連りに之を誘ひ、良人は連りに之を迷はし、遂に彼の天使すら墮落し、イーブすら誘惑せられたる如く、彼等が高尙潔白なる志想をも敢て凡俗にし了するあり。吾人數多の女學生を知れり、其學校に在るや顏色花の如し、其業を卒ゆるや英志燃ゆる如し、只だ善を爲さんとに決心して遠く志を立つるもの頗ぶる多きを知る、然れども父兄は乍まち嚴命して之を嫁せしめ、婚嫁は乍まち之をして老衰せしむ、其の花の如くなりし顏色は則はち棗の如くなり、其の高尙なりし英志は頓はかに收縮し去る。吾人屢ば如此き景况を目撃して、常に甚はだ疑がひ、女學生の意思甚弱にして決して頼がたきとを歎じたりき、然ども細かに其事由を考ふるときは之必らずや女性の弱點にあらず、反て實に今の男子の亂暴無慈悲なる、世俗の束縛極て壓制專擅なるに由るとを確認したり。見よ、女學生細君の棗の如き顏は其胸中無量の苦しみあるを示すなり、其頓に收縮したる志想

は彼が胸裏に夫丈けの重みを壓迫したるに由るなり、蓋し文字を知るは是れ憂患の初めにして、自由を知るは則はち不自由を感ずるの初めなるなり、女學生にして若し學ぶ所なく、或は淡泊温順なる田舍乙女にてあり、或は女大學の外に知るなき姫御前にてあらんには、彼等が心は何如に安かりつらん、男子の一顧は百年の幸わひとなり、良人の半笑や無限の福とこそ見えなんものを。彼等は國民が自由を味わへるが如くに自由を味わひ、國民が文明を知りたる如くに文明を知れり、故に彼等が志想は、最早閨裏の怨恨的にあらず、彼等が自由も、最早亦た庭三尺の團扇的にあらず、雲雀の如く高く飛ばんとも思ひ、鳳凰の如く清よく下らんとも思ひ、鴛鴦の如く睦まじく棲わんとも思ひ、鴻雁燕雀の如く往來せんとも思ひしなるべし。然るに彼等は元の如く籠に囚われたり、若し初めより籠に入られ、本來人に弄ばるべきものと斷念せしならば、時に或は戸を開かるゝも決して出でざるべし、然るに既に高飛跳躍の自由を知り、和睦往來の樂しみを知りて而して猶ほ籠中に囚われ、啻に囚わるゝのみならず寧ろ初よりも嚴しく叱らるゝに至りては、其の苦痛抑そも何如んぞや。特に吾人をして酸鼻せしむるものは女學生の道念の伸びざるとなり、本文の記者は實に男子にして頗ぶる男子の榮譽を守るものなり、然れども彼の道念の高潔なるに至りては常に女性を推尊することを猶豫せざるもの也、其の身を犧牲にして善を爲さんとするの熱心に富むや、遠く男性の及ぶ所に非ず、其涙は同情の爲に流れ慈善の爲に溢れ正義の爲に泫漣たり、凡そ左程に敎育なきの女性にても彼が本質は大率ね如此し、況んや十年高等の敎育を受け、久しく古今義人の活歷史に胸を温ためたるものは、其の善を慕ひ、善を行ひ、善に勉むるの志想や極めて美なるものあり、然れども一旦滔々たる世上の男子に嫁するときは、彼が美なる志想は多く俗情俗望に覆われ、喩へば夕日の雲中に出沒し、隱現しつゝ、漸やく下りて遂に全く隱るゝが如く、彼が善に厚きの情念悉とく見えざるに至る。試みにゼヲヂエリヲツトの小説を一讀し、高尙なる女學生が婚姻によりて何如に困難するかを見よ、吾人豈に小説的に言わんや、實に多くの實證あるによりて言ふなり。人もし英才の夭折に歎ぜば尤も多く此の女學生の埋沒するに歎ずべし、彼の如き美質一と度び頭を擡げて亦た伏す、彼の如き進化一と度成らんとして亦た挫く、嗚呼悲しからずや。日本の今日、ダイトーに嫁する幾多のロモラあり、然れども遂

に終を完ふするのロモラは未だ小説の外に於て見るあらざるなり、悲しひ哉。

然りと云へども吾人は只だ涙を揮つて女學生の亡靈と共に泣くものにあらず、寧ろ一言の蕪辭を呈して之を慰さめんとを欲するもの也、諸君の靈倚ほ聞くあらば願はくは降臨せよ。

諸君彼の鹽を水中に投ずるを見よ、一握の鹽僅溶して果して幾干の水を鹹くしたる、然れども之れ全く効あきにあらず、微鹽日に加わる時は大洋の水倚ほ全く鹹化するにあらずや、左れば諸君は苦しみて斃し、諸君が姉妹亦苦しみて斃す、吾人亦深く痛泣して止まずと云へども之れ豈に異日全世の味を化するものにあらずや、君等は實に世の鹽あり、鹽もし其味を水中に於て失わば鹽やすでに廢すと云へども水すでに鹹らし、諸君亦何んぞ恨まん。　彼の泉の噴騰するを見よ、其水遠く地中に埋沒して而して後ち大ひに發出するが爲めにあらずや、彼の巨木の亭々として茂るを見よ、其根深く地下に蟠延し而して後ち大ひに幹枝を抽くが爲めにあらずや、彼の高樓の巍峩として聳ゆるを見よ、其の礎固く地臺に確定し而して後ち大ひに柱棟を架するが爲めにあらずや、亦彼の寒暖計の冷温を示すを見よ、氷點は氷の如く冷たしと云へり、然れども氷點すでに三十二度の温あり、故に之より以上よく温暖を現わすにあらずや、左れば何物に於ても見へざるの底あり、其底陰に圓滿して而して后ち陽に發出する所ろのものあるを得るなり。然らば則はち今の夭折し、中挫し、廢絕し、其肉死せずして其精他に破ぶらるゝ如きものは、豈に是れ他日の大陽發を用意するものにあらずや、此に於てか初代の人の目下に埋沒せられ、陰々裏に退けらるゝものは常に然るべし、亦た何ぞ悲しまん。

彼の維新の革命を見よ、是れ豈に日本國民初めて自由を享受するの旭天にあらずや、然れども此の旭天快開し、大陽盛出するに至る迄でには、露下り、風凄ごく、月循行したり、誰か薩長土肥の勞力によりて乍まち此の大業を成就せしと云はん、高山彦九郎も、蒲生君平も、賴山陽も、井伊直弼も、松本謙三郎も、平野二郎も、或は殺ろされ、或は苦死し、或は鬱死したり、爾來大なると象山の如く、高きと小楠の如きも皆な非命に斃せり、蓋し彼等が血流れて地下に入り、彼等が骨積んで山とあり、彼等が言論流れて風となり、彼等が精神四散して空氣となり、隱滅し、匿沒し、消化して而して後ち初めて大功業、東天に爆發し成れり。　眼を放つて各國の史乘

を見よ佛國の革命はルイ首切るゝの日に初めて出來せしか、英國の革命はクロムエル職に就くの日に於て初めて出來せしか、合衆國の革命はワシントン大統領となるの日に於て初めて出來せしか、ルーテルの宗教改革はルーテルの獨手によりて成りしか、縱地の傳道は會堂を建るの日に於て初まりしか、嗚呼何んぞ然らん、其の見ゆるものは見へざるものゝ代表なり、其聞ゆるものは聞えざるものゝ名代なり、名代代表の一常に百を表わすを知らば、彼等が背しろ、彼等が下た、彼等が以前には、實に幾多の彼等の如きものあり、實に幾多の彼等が如きものの見へず聞へざるものとなりて而して後ち彼等初めて見るべく聞くべきものとなれり。故に今日高等なる女學生諸君の悶死し、廢絶し、中折し、消滅するものは、即はち異日の大基礎を造るもの也。炬火を水に投ぜよ、乍まち消ゆ、更らに投ぜよ亦乍まち消ゆ、然れども炬火の屢ば消ゆるものは即はち水を熱湯とするものにあらずや、亡靈尙饗。

論說

○英國のピユーリタン

櫻田優香果 譯

余英國ピユーリタンの事緒を讀み今代我國の時事に比して大に感ずる所あり則急卒意譯して之れを貴社に送る原書は大家マコーレー氏譯文の拙陋なるを以て原文の錦綉を汚わん事を恐る。

余は世上に顯はれたる人民の最も著しき集合躰則ちピユーリタンに付第一に述べんと欲す、彼等が性質の嫌惡すべきと笑ふ可きの點は其外面に於て現はれたれば何人と雖も是れを知るに苦しまざるべし且つ潛心其性質に注意しまた害心を以てこれを伺ふの徒も多かりき維新革命ののち（千六百六十年チャールス二世の時に於ける、ハウス、ブフ、スタート、の維新）數年間は彼の徒に對する世の誹謗と嘲笑とはいよ〳〵其度を高めたりと云はざるべからず、當時出板或は演劇の事最も亂雜なりしに關はらずピユーリタンは此の二物の爲めに非常なる攻擊を蒙れり、そもピユーリタンは文學の嗜好を有するの人々に非ず而して彼等は又人心を買ふに尤も拙なるが爲に自らを以て自らを救護する能はず況んや世人がピユーリタンを保護せんとするも到底なし得ざる所なりき、故に彼の徒は譏書を造て世を諷するの人又は演劇の作者等に向て愛憐を請の止むを得ざるに至る、蓋しピユーリタンが何故に世人の嘲笑を來たしたるやを問へば彼等は殊更に衣服の淡裝を誇り、其容貌を見惡くし、故意に鼻聲をなし、長き祈禱を捧げ、又はヘブリユーの名を冒用し、或は聖經の句節を引

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

用して世上の學術を慢り、文雅なる快樂を嫌厭して顧みざるの外ならざるべし、蓋し世上のピユーリタンに於る攻撃は俊秀なる記者をして屢々其實を誤まらしめし事少なからず余輩も世上歴史の道理を研究する人々の爲に其迷に落ち入らざるを覺悟せざるべからず。

世人が嘲笑して措かざる匹夫の徒は何ぞ知らん貴族政躰を毀つの人、君主致命の非法を破るの人、歐洲中最良の軍隊を組織するの人、英國の名をして大呂九鼎より重からしめたるの人ならんとは、蓋し世人が此の徒を嘲笑したる唯だ徒らに其の外形に止まり救共命則定の標章か或は僧侶の衣服を笑ふと何ぞ異ならんや余は彼等が外形を以て人心を引く能はざりしを惜むと雖もバゼニオが外部の粗惡なる鉛函に寶石の滿てるを擇で死人の首級或は愚者の頭を飾める寶玉の箱を捨てたるにならわざるべからずもし余をして内外孰れを取らんと欲するやと問はゞ余は演劇場裏に於て見るバゼニオたるを覺悟すべきなり彼れピユーリタンは勇才豪直にして痴漢愚夫を勵まし之れを喚起するの力あるもチヤールス一世が優美なる從者中に齡わいするを得ざるべしチヤールス二世の高雅禮節を重ずる朝廷には亦た列するを得ざるべきか然れども其精心に至て大に感ず可き者こそあれ。

ピユーリタンが敬神の功德により其性質に於て格段なる點を有せり普通の論法に於て神の攝理を知るを以て滿足せず凡そ事みな神の御心によらざるはなく物大小に關わらず神力の之れに加はらざるなきと人世の目的は神意に協ふにあるを確認して動かず、他宗に於て虛影の儀式に流れ眞正なる靈魂上の禮拜を顧みざるを惡み、陰幽なる面衣を被て神の影を仰がんよりは寧しろ眩惑す可きの光りを拜し面と面とを合せて神と交通せん事を望めり是の故にピユーリタンは自然地に付ける榮利を輕じ貴賤の別貧富の差は悉く空なる事を信ぜり故に浮世の學術、技藝、位階の如きは決して之れを顧みる事なかりき彼等は哲學者或は詩人の働きに付ては一向に顧みざるも天惠の聖書は精確に研究せり、其の名は竹帛に大書さるゝを希はず生命の書にしるされん事を望み從者の莊嚴なる隊に守られざるも天の使は彼等を保護するを知れり巍々たる宮殿は美たりと雖ども榮の冠りは失するなきを覺とり雄辨に黃金に富だる貴族の僧侶を見て一層自からは神の惠みを得たる僕と考へ彼等を侮りたり、而して如何に賤少微弱のものたりとも神の望みは必ずその人の上にあり一擧手一倒足に於て神の注意

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

と悪魔の誘惑其人の上に置かれ創世のはじめより失天地の終り迄其人の運命は消滅せざるを信じ、淺見の政治家が浮世に源因を歸したる事柄も、國家の盛衰も悉く自己の爲めに神がなしたまふ事を信じ、神は聖書を以て豫言者の琴を以て其御心を顯したまふ事を信じ、基督の艱難の汗により、其寶血により惡の誘ひを免れ罪より救われたりとし、日も暗く巖も裂け神の子が悲痛をうくる爲め天地悉く哭慟するとなす。

ピユーリタンは斯く二つの異りたる人より造られしが如し則ち自制、悔改、讃美、自敬、の念あり然れども亦た一方より見れば誇慢、平安、剛直、明智等の性質を備ふ、ピユーリタンは創造者が(神の)御前には自己を土芥に比すと雖も、君主に對しては己が足をその首に置くなるべし彼が靜粛熱心なる祈禱に於ては感動、歎息、流涕して止まず、榮えある或は恐る可き迷の爲めに半ばは狂氣し、天使の音樂或は惡魔が誘ひの聲を耳にし、ツエーンの如き永遠に到るの快樂を授けられたりとし或はフリーフードの如く神の形ちを見能はざると號泣し天國を夢み地獄の焔にうなされ傍見實に痴漢の觀なき能はず而してピユーリタンが一朝議員の坐を占むるか或は戰場に劍を弄ぶの時に於て决して舊日の迷信者流の觀なきなり、彼れが戰場の豪壯なる議場の雄美なる風采を知らずして只に敬神の神典に身を委ねたる有様を見ば何人か笑を忍ぶの人あらんや然れども戰場議場のピユーリタンを見ば笑はんと欲するも能はざるべし或る記者は曰く迷信ピユリータンの如き者にして議事或は戰爭に於てかく決斷の不抜に目的の固きは宗教上の熱心と相違せりと然れども彼等が宗教に熱心なるが爲めに他の事物を冷視して顧みざらしめ以て其働をなさしむるものか試みに思へ一の心氣最も強盛ならんには、他に對する則ち愛憎の念も希望も恐慌もその勢力を薄からしめん死何ぞ恐るゝに足らん浮世の快樂恃む可きものに非ずとせんか然らばピユーリタンは喜憂苦樂の感なきか然らず彼れ流す可きの涙あり笑ふ可きの容貌もあり喜こびもあり悲みもありたゞ浮世の眞相を知るが故に浮世の事物に向て喜憂の感を起さゞるなり、彼れ宗教に熱心なるが爲めにストヰックたり彼れは己が心より種々の情慾と僻見とを去り危險と腐蝕の感化を受けざるより其心を高めたり、然れば時々愚痴なる目的を立てゝこれに進まんとするも亦た愚なる方法に依らざりき、ピユーリタンは Sir Artegal's iron man Talus が妨ぐる者は破り抵抗するものは毀ち人に似て弱點なく、疲勞、快樂、苦痛を知ら

ず千仞の岡上も干將莫邪の利器も之れを拒ぐによしなしと云ふに比し可なるか然り。

批評

○「エドモンド、ボルク」の傳を讀む

叢菊野史

女學雜誌第百七十號史傳の欄內に於て自然道人の起稿に係れる「エドモンド、ボルク」の傳を一讀し其の文章の簡短にして善く意を盡くし嚴正にして乾燥せざるに感服すると共に亦た「ボルク」の性質才藻を欽羨するの情勃興せり道人曰らく「マコーレー」の文は深く「エドモンド、ボルク」に淵源すと余は「マコーレー」の著書を精讀せざれども唯だ其の剛毅にして雄辯なるを知る其氣節一世に卓絕し學識千古に超乘するを知る「マコーレー」文集中所々に散見するところの記事に因れば「ボルク」は眞に政治家の泰斗たるもの丶如し然れども其の誤も亦た大なりし其德行の君子たるに至ては誰か疑を存せん。「ボルク」は自由の親友にして民權の忠臣なり然れども敢て極端の民權家過激の自由黨にあらず然に不幸にして生れて「ジヨージ」第三世なる暗主に遭遇し其の忌嫌するところとなりたれば宰相の位に昇るとあたはず抑も「ジョージ」第三世は生來偏見狹識にして始終執拗と猜疑を持し天下の大計を誤りしが晚年に及では純然たる狂人となり其の狂病中でろ少しく癒へしも嘗て全く治せざるなり故に「ボルク」の自由主義を憎み之を忌で內閣に入れず此の頃は今日と異て英國君主の權頗る盛なれば君主の一心、萬衆の屬望を空しからしめ輿論の推戴せる政治家も君主の眷顧なくば內閣に入るとあたはざるなり是を以て「ボルク」の才識を以て常に反對黨の主領となり「ホックス」と共に現政府を攻擊せり蓋し博學多識上希臘羅甸の文學に精しく下、東印度の事情に明なり故に志を得ざるの時と雖ども鬱憂自傷するとなく其の閑室に在て靜に「デモスゼテス」の遺稿を讀み「シスロー」の殘篇を閱し「ボルジル」「ホレース」を友とし心を我が不遇に留めずして消光せり是れ少「ピット」に比すれば一層見識あるところなり少「ピット」は宰相の位に在ると前後殆ど廿年其間一旦免職さるゝや志を內閣に繫ぎ鬱思無聊に耐へずと云へば恰も屈原賈生の如くなりしか抑も「ジョージ」第三世の治世は甚はだ長くして我が德川家治の時に當り最とも人才に富みしなり故にピット父子「セリダン」「ホックス」「ウイルベルホールス」「クライブ」「ハ

スチングス」「ギッボン」「アダムスミス」「ジヨンソン」「ボルネー」女史等俊傑才子前後輩出すと雖も學識に兼ねて雄辨膽略を有すると「ボルク」の如きものはあらず其一度怒るや米國征討を不可とし再び怒るや「ハスチングス」を彈劾し三び怒や佛國革命を敵視せり前の二者は甚だ得策なりしが第三者は大に誤れり蓋し「ボルク」は晩年佛國革命の慘狀を見て之を自由と民權より生ずる結果とし爲めに自由と民權を擯斥し反て君主專政に左袒すに至れり是れ「ボルク」一生の誤りなり「ボルク」の卓識と雖も史上の眞相を觀破するとわたはず佛國革命に關渉して之を抑壓せんと欲せり夫れ佛國革命は古來君主擅政の反動にして君主の虐政止まば革命の暴行も亦た日ならずして自ら已むべきものなるに「ボルク」は之を曉らず英國及び歐洲列國の兵力を以て佛國の民政を壓伏せんとし之を激して百倍の勇氣を生ぜしめ終に「ナポレオン」をして覇業を成さしめり「ボルク」は天性慷慨にして其の演壇に上るや滿腔の熱血、口を突て迸る其の見識に加ふるに最も希臘羅甸の文字に富むを以て時に臨て腦中無盡藏の辭句を活用し其の出沒變化窮りなく其の文重莊にして活動するが如し然るに「マコーレー」の文は麗艶濃厚冷語冷評を以て滿つ「ペイン」も「マコーレー」の文を評して華美に過ぎて主義を失が故に事を學ぶには宜しからずと云へり「マコーレー」は辨は甚だ文に劣れり然るに「ボルク」は辨反て文に優れり「マコーレー」は冷談を以て罵詈するを常とするに「ボルク」は熱心憤氣發して敵説を論破するものなり要するに「ボルク」は德義餘りて才に誇らず文の巧を求めずして自ら巧なるものなり「マコーレー」は文を弄し才に誇り彫琢の末技に富で反て德義を欠くが如くに見ゆるなり。

「ボルク」は小敵を視て侮らず大敵を視て恐れず其の「ハスチングス」を彈劾するの演説を爲すや万衆の喝采を博したれば常の人ならば傲然として長歩し得色を以て雄視すべきに左はあらずして「ボルチー」女史が傍聽席に居るを見て之に向て慇懃に禮敬せり是れ亦た其の平生に背かずと謂ふべし尙ほ稿を續て論ぜんと欲すれども炎暑耐へがたく頭痛み眼眩み筆を揮ふとわたはず黄塵深き所、氣息塞がり赤熱甚き時汗粒流れ覺へず筆を投じて止む。

○美辭學　上下二篇　高田早苗氏著　撫象子

論理學は猶ほ器械に名を附する者の如し、美辭學と云ふもの亦た之に類するか、曰く前に斯々と論じて後ち云々と結べば議論明確なりと云ふ、然り斯く承知するは承知せざるよりは

利益あらんと勿論なりと云へど、好し承知したりとも實に之が爲に立派なる議論を産すべきにあらず、若し議論なるものは只だ製造すべきものか、若くは只だ結搆する丈けのものにてあらば、論理學なるもの蓋し十分の價ひあるらん。然るに之に大切なるもの實は決して如此きにあらず、製造の仕方、結搆の順序の如きは只だ表面の皮に過ぎず、苟くも理定まり意至るときは議論風の如く流る、而して一顧すれば此に整然たる法あるなり。ミルの論理論固より精はしからざるにあらず、然れども此れたゞ古しへの大家の論法を集めて其方式を歸納し、少さか心理物理に照して其式方を定めたるに過ぎず、故に人智進み、新たなる大家新たに起らば此に新らしき論法を生ぜん、左らば議論の後に於て論法生ず、論法ありてのちに議論あるに非ざる也、孔子先づ出で而して后ち講釋するものあり、アリストートル出で而して後ち解釋するものあり、議論するものあり而してのち論理學者起る。論理學無用の説推して文典論の無用を証し、論法文典の無用なる説亦推して美辭學の無用なるを証すべしと。

斯く論ずるものもあれども固より奇矯に過たるの説なり、美辭學を學びて直ちに能文達辨ならんとするは固より心得違ひなれども、之を學ぶとの全く無用なるを論ずるは亦た古への豪傑はたゞに似たり、古への豪傑は戰法も入らず、政理も入らず、議論も入らず、只だ爲すにありと云ふ、此れ一理なきにあらねど、決して通論に非ず。

況んや此の書の如きは中々に苦辛して出來たる如し、和漢文章よりの引証は必らずしも六かしくあらざりしならんが、然れども亦決して容易に非ず、古人云く美辭學を論ずるの書は先づ尤も美辭ならざる可らずと、此書只だ高田君平生の能文に似ざるあるは遺憾と云ふべし。

吾人此書の出でたるを祝す、今や文海混沌たり、此時に於て之ある實に祝すべきものか、然れども今や亦た摸倣製造的の文章盛んなり、此時に於てこれある果して祝すべきものか。

樂雅記　第一號

ラクガキは正義の常規に則とり道德の準繩を守り滑稽洒落を經となし雅致風趣を緯と爲して軸は動かぬ德義の二字に置き或は諷刺し警戒し或は琢磨し研究し世教を補ひ文字を磨くを以て目的とする由し。一種風變の者にして宜しく一あるべし二ある可らざるもの也。

明治美術會報告　第一回

吾人は最初より此會に贊成なり、今ま其第一回報告を手にして竊かに誇る所ろ祝する所ろ信ずる所ろ多し。

光　第二號

禁酒雜誌中に出色の觀あるは元の北總禁酒會今ま帝國禁酒會關東部より發行する「光」にてあらんか、來月よりは月一回發兌に改められたるよし、益々光明かゝやぐべし。

雜錄

○墓を堀るもの

しのぶ

昨夜佳人水に溺れて死せり、今夕風高く野色寒むし、土堀る者二人穴を鋤く、髑髏兀々として出づ、然れども高笑漫語して禁ずるなし、彼等は穿てる墓に人を葬むると知らざるに非ず、之を知れど毫も悲しきとなき歟、一人輙はち歌ふ

己も戀して乙女にほれたほれた別れは死ぬこゝち……

ハムレット歎じて曰く、彼れ墓を穿ちつゝ歌へり、墓を造くる彼に悲しからざるかと、われ亦た數ば此の問を起す。穴を堀るもの其心土よりも冷たし、然れども啻に穴を堀るもののみに非ず、彼の棺を荷ふものを見よ、輕く歩み笑ひ罵しる、恰かも商人が其の賣る品を擔ぐに似たり、然れども棺を荷ふものゝ冷たき倘可也、彼の隨ひて弔ふものを見よ、喪服嚴めしく、悔やみ糸の如し、左れど彼等は只だ名を帳に記るし、名刺を盆に載せ、菓子强飯の折を持歸るの他なき、恰かも世上の附合に同伴せる如し、然れども隨ひて弔ふものゝ冷たき倘可也、彼の正に之を弔ふ所ろの僧侶神官に至りては抑そも何の心ぞや、聲悲しと云へども鳴る銅響く鈸の如し、嘵々喃々として只だ黃金の爲に暗誦し、空唱す、彼等は決して死せしものゝあるを悲しまず、實に死せしもののあるを喜ぶ。

われ今の葬むりに會する每に常に痛む、人の心何んぞ寒くして薄きと如此なるや、抑そも死は人世の最凶事なり、此を見て若し心を動かすとなくんば何事か能く靈をして痛しましめん、朝たに笑ひたる美人も夕べの露と消え、今日扼腕したる少年も明日忽まち死す、而して吾れ一度び死せば則ち吾あらざるか、北邙の烟去れども空に登り、天王寺の骨碎くれども土に化す、然るに吾が富貴生殘り、功名百世に老し、愛憎無限無終なるに、七十の齒ひ古來稀にして卒然死し、三寸息絶して萬事悉とく休すべきか、吾れ之を思ふときは直ちに人世の實相を考がへ、深く一身の征く所ろを思はざるとなし。

死は人に敎ゆ、汝ぢの末期亦如此し、汝ぢが愛人の命運亦如

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

此しと、左れば落花嵐に散るもわれ太たく思ひ、月浮雲に覆はるゝも亦甚たく思ふ、人の死を見るとき安んぞ沈想冥默して切に省りみざらんや、況んや友人の死に於てをや、況んや最愛の人の死に於てをや。

而して堀るもの彼の如く、荷ふもの彼の如く、送るもの彼の如く、弔ふもの彼の如し、われ憮然として歎じ、慨然として慷げき、憤然として怨る。家に歸りて雲間の月に靜對すれば、吾人が不常天地を見て其教へを請けざると大率ね亦た彼の冷々の人の如し、深く自戒す。

○宗祇名月の晴冥の發句

宗祇の句とやらん名月のくもりたるに

一とせの月をくもらすこよひかな

とせられあくる年の明月のはれきりたるにまた

一とせの月をくもらすこよひかな

詞はおなじけれども意の用ひやう別のものなり等類にあらず

また梅翁師のある年のくれに

くれやすしこんな事なら百とせも

その一夜あけて元日に

たちやすしこんな事なら百とせも

と作せられぬこの氣轉また作なり。（[illegible]）

○古今文學の相違　[illegible]洪子

古のは高遠なり今のは巧緻なり古への人は巧を求めず自然にして巧を爲す故に野ならず今の人は巧ならんと欲して巧を作る故に俗氣あり。殊に深く文學を涉獵せずして強て古人ならんとするは大なる誤謬にして唯其缺點を寫すに止まらん。芭蕉の句を見よ盡く高遠飄逸の姿あり、

道の邊の木槿は馬にくはれけり

やがて死ぬ景色も見へず蟬の聲

春もやゝ景色とゝなふつきと梅

初しぐれ猿も小みのをほしげなり。

近代に及んで巧は巧となりしかど高遠の氣に乏しきが如し、

朝がほに釣瓶とられてもらひ水

元日や鬼ひしぐ手もひざのうゑ

手の屆く枝からおしをもぎる月

殊に附合の如き益々巧にして益々野卑となれり、梅室蒼虬等は正風を唱道せし大家なれども夫すら最も高名にして人口に膾炙する「風吹かぬ方に行燈さしむけて」の句に「去らるゝ覺へないとつぶやく」と附けたる如き巧は申分なけれど高遠

に乏しきの感あり。巧は求むべし高遠は摸すべからず。

○古人の名に恐るゝ勿れ　梅の屋

古人なりとも神にも佛にもあらねば其作りしものが凡て立派なるにあらざるに古人の名に聞慄して是が非でも是を珍重するは笑ふべし

何者のひりちらしたる道の屎（花つみ栞）
雨のをとしのをつくとは此夜なり
亭主にかくすゑんのしやうべん
（是等の附句は作者の俗情推せられて厭ふべきなり）

獨り俳道のみか詩文歌曲共に厭ふべきの作古人にもまゝあれば古人なりとて善惡の區別なく先入心に支配せられて暗雲に拜崇するは盲者と云ふべし、心ある人は必ず其愚を笑はん。馬琴なりとて西鶴なりとて金甌無缺といふへなし、其隱微を悟るを批評家といひ其缺點を知らざるを心醉家といふ即ち拜崇主義の人なり。心醉家はなほ愍れむべし拜崇者は爪彈きすべし終に救ふべからず。

○月は月なり豈姨捨のみを賞でんや　ふ、ち、

鏡臺山の月四十有餘の水田に影ず、然れども月は仝じ月にして四十有餘の水田にうつるも各々持形あるにあらず、われは其よぎゆかならんよりは寧ろ清漣に銀影を止め瀲灔に金線を漂はすの優れるを喜ぶ。

○細君經濟學　山下石翁

經濟學とは何ぞや

經濟學とは入費を少なくして益を多くするの學問なり、而して細君經濟學とは、細君の領分にて可成く入費を省き利益を余計にするの學問あり、金を出して物を買ふは當り前なり、金なくして物を買ふ之を妙法と云ふ、錢を使つて快ちよくするは珍らしくなし、錢を用ひずして面白くする之を秘訣と爲す、細君の尊とき所ろ實に此にあり。

錢なくして美食し

學者云く、人は理屈を知る動物なりと、又云く、人は笑ふを爲す動物なりと、然れども佛人チーンは云へり、人は料理をする動物なりと、女學子加へて曰く、女獨り料理す、故に女は人中の人なりと。女にして料理せざるは玉の卮、底なきが如し、料理して甘く料理せざるは、玉の卮底ありて洩るゝが如し。　高き品物を買ふて甘くするは誰れにも出來べし、並みの食物を甘く料理して甘く味ひする之を料理經濟と云ふ、澤庵と云へども切方によりて味ひ別なり、御飯と云へども盛

やうによりて快不快あり、况んや惣べての料理をや。內閣に於て能く料理するもの之を賢相と云ふ、臺所に於て好く料理するもの之を良妻と云ふ。

費少くして善居す

家大ひなるが故に尊つとからず、美なるを以て尊つとしとす、家美なるが故に面白からず、美にするを以て賢しこしとす、巨萬を棄て、山海の寶を集め、而して能く家を美にするは何人も能くす、八疊の座敷廣ろきにあらず、低天井頭まを打たざるにあらず、然れども若し能く之を方付くれば、大ひなるアバラ屋に優る、夢想兵衛曰く、家ひろしと云へども丈伸びして疊み一疊に過ぎずと、其他は便利と心持ちのみ、故に千疊座敷の荒れたるよりも茶座敷の調へるに若かず、家小ありと云へども物を散らさゞれば廣し、座敷狹しと云へども子供を泣かせざれば靜かなり。

○いざよひの遊び　　みなせ

十六夜の月をよもすがらたのしまんものと親しき友どちと舟を品川の沖に浮べたり、昨日には似ず雲の行違ふさまいと繁し、吹く風のまに〳〵散らされんには知らずさなくば月の掩はれて一夜を空しく暗き舟のうちに過さずばなど口惜しげに物語るあれば、月見にこそ來れ雲見には來ぬものよなどつぶやく人もありたゞ東の方のみ打眺め居たり、やゝありて少し白み渡りたると見る間に待ちに待ちし月の出でければ淚流す迄に喜びたり見る間に高かふ登りたれば歌をや作らん畫をやかゝんなど思ひまよへども思ふのみにてその甲斐もなし、すなどり人がたく夜あみの篝火、烟霧の間に明滅する燈台の光り、頭をめぐらせば芝濱のあたりより洲崎の邊り迄は螢火の如き火影增上寺の林本願寺の高樓濱の離宮品川の岬は朧ならず見分けやすし、物騷がしかりし幼子ひたひら景色にのみ眺めいりたるさまにて以前には似ず舟のうちことに靜なり、嗚呼天然の美は何人かよく味ふものぞ酒間天然の美を伺て揚々自得する者あり、彼れ未だ天然の美を知らざるなり、喧騷亂雜の氣を以て何ぞ造化極意を知り得んや、濁世塵界の眼孔は眞正の美を伺ひ得ざるなり、俗世吾獨り美を知るの思あり。

○角づきあひ　　傍觀子

「こゝのうしかしこのうしがよりあひて角づきあひをするぞおかしき」。桃林にても遊び給はずば角は八ツあたりに牛は愛しとぞ申すべし。是は二代目西鶴さん何か御新作かね。ア

イサ當世五人男と云ふ妙なものを作りやした西鶴には及ぶまいが閼水眼を廻しと云ふ名作サ。ハテそれは面白さうだ時に東洋のサカレーはどうしました。ウン彼奴の？小說も閉口するよダがぬしはあのアヂソン氣違を御承知か。ハア熟懇ですあれのスペクテートア信仰も恐れる奴の批評といやアきつとアヂソン曰くだからこまるよ。かうも天狗が寄合ジヤア崇徳帝が松山から臨御になると云ふもんだ。ダカラ斯道は次第に衰へて我黨是非なく腕を揮ふのだ祖先のゲーテに對しても濟まんからナア。われらも同樣此腕を揮はずば西鶴の神靈に申譯がないテ。

盛んなる當時の文學界。西鶴其碩馬琴京傳は申すに及ばずスコット、サカレー、レッシング、ゾーラ、デッケンスのともがらこゝかしこに旗上するぞいさましき。二代目の風來巢林子既に顯はれて今はいづくにか末世を厭はれしと覺ゆ。名は實に伴はず、實は名を賴まず。說は古語に依て重からず、古語は說を助くる能はず。盛んなるにつけてやさしき文學界、人名字書と名言集で批評家にも小說家にもなれるとよ。

「政事現象相關論者」の著者嘗て曰く倫敦タイムスの紙上に名論名文章の出し日な記憶せよ而して其以後若干時日の文學界に注意せよ、不思議にも世上幾多の文妹忽為之に倣ふべしと。躰操教師某氏切りに府民の歩るき方の惡しきに心配す何如にして其の家鴨の行列の如き足付きを改めんかと。南石先生之な教へて曰く、兵隊な雇つて日々ラッパを吹かせ終日府内なぐる〳〵まわらすべし、足付自づから改まらんと。蓋し日本人の如き眞似な好み、お心好き國民中に生れしは幸はい也、一の飛拔しとな爲せ、一の名文章を作れ、萬人皆な之に隨つて傚はん。

○やるまひぞ酒の相手

長尻で評判の上戸客も太郎冠者を三四獻の饗應に目もくたびれて倦伸こらへるくるしさ「ときにモウ何時じやらふな」。「まだ四つすぎでござらふよ」。「何をシヤラ〳〵とモウ大かた七ツ時分でもあらふ」。「仰山な事お云ひやる何で七ツになりますものぞ」。「いや〳〵狂言のなかばでさへ八ツ前ぞ〳〵と云ふた」。

○鉢の木

人は常の心掛が肝心でござる佐野源左衛門は雪の夜のつもるはなしに西明寺殿をもてなさふと粟の飯をふるまひ焚火にあたらせんと秘藏の鉢植を三本まで焚た其志の切なると忠義の

厚きを感じて梅松櫻を對た故加賀に梅田越中に櫻井上野に松枝此三ヶ莊を賜はるは常世夫婦が心掛のよい故でござる何でも人は心掛が肝心じやと話すとそばの男が成ほど三ヶ莊を賜はつたは仕合せな事じやが粟の飯を振舞てもなぜに安房の國をむらひましなんだ。

○花より月見

四五輩をあつめ俳諧して樂しむ丁稚酌しながら旦那樣徒然に月花はさのみめにみるものかわとござりますがあれは何の事でござります。ハテわれはこしやくな事を聞くまづ月は十五日がまん月とて丸く滿るなれども十六日からはかける花は咲きも殘らずちりも初めずといふ時が盛なれども落花とて次第におとろへる山ものぼれば下らねばならぬ人間もその通り老衰とて年よればおとろへるほどに身に引受けて見よ月にめで花にたわむれ酒をのみ心をよろこばせるばかりではほいないといふ事じや。アイ有がたふござります合點が參りました、そして月と花とはどちらが樂しみでござります。ハテいろ〳〵な事をそんな事は見世で聞けと云はれて帳場へ行き番頭樣つれ〴〵草にある月花の語を旦那樣に承りましたが面白い事なれども月と花とはいづれが樂しみでござりますと申したればおまへに聞けとおつしやります番頭小首をかたぶけそれは月がたのしみさ。トハなぜへ。さればてうちんが入らぬわよ。

○ゐけんのかねが三百兩

兄弟二人を呼び親父いふやう惣領は外にいひぶんないがとかく人の衣るい紙入きせる何を見てもねうちをするがわるひ癖じやずいぶん氣をつけたがよい脇できいて居ても氣の毒な又弟は地口とやらが好で重い人の前も憚からず大事の相談の中言にも地口をいふわるくせ必らず〳〵二人ともに氣をつけて癖の出ぬやうに心がけたがよいと異見すれば惣領は手をつき有がたい御教訓唯今までどうか〳〵と心づきませず居ましたが思召の段身にしみ〴〵有がたふござります世話にも御異見五兩堪忍十兩と申せども此御異見どふ安くつもつても三百兩がものはござりますとじきに癖をいへば弟もこらへかね兄貴三百兩とは異見のかねか。

○都人もざいご中將

知りめさるじやらふ業平が東下りに隅田川の鳥を都鳥とよみしは何故か。さればでござる都人でも在五中將といふやうなものじや。

兒籃

○わるだくみ　（終）　草の屋

私は教員室に呼び込まれた時は居所の羊と云ふような心持ちがして日頃やさしひ先生の顏も裁判官か閻魔のように見た、トムも平氣な顏をして居るようだが併しこれも内心には幾分か恐れが在たようだ。先生は　ムーアさんと私の名を第一に呼だ身にヅットその聲がしみ渡て今でも忘れられない。あなたはギットさんの着物を取たでしよう、私は何と返事をしようかウロ〳〵して居たが思ひ切て、イーエ、と答へた先生は亦た隱かにギットに向ひ　ギットさんあなたは衣物をだれにとられましたと問たするとギットは　トムが……と答へた私は案外な答へをギットがした事を驚たが先生はふたゝびトムに向ひトムあなたがギットの上着を取たノデスカと問たその時トムは私と同じようにイーエ私は私の上着を取らうと思ふ時ギットさんがかへつて私の上着を取らうとなすつたノデス私が何でギットの上着を知るものデスカ、先生は此答を聞て傍の上着を指しあの衣物はだれのですかよく御覽なさいと云われた私が隣家へほうり込だ着物ダモノよく知て居るが知らん顏をしてはじめて見たような顏をして居るとトムは不思議そうな風をして先きの着物を見ては自分の着物を見て居る教師はトムに向て激しき聲を出したギットも私も驚たがトムは尚更ふるへるばかりであつた、トム今着て居る着物はだれの着物か自分で改めて見るがよいされば ジヨセフ、ギットと云ふ確な持主がある其の着物の裏はフランネルだが御前のは海羅紗の筈だ、トムはます〳〵驚たが大膽にも、これは私のです私のはフランネルの裏が付て居ります、先生は前より一きわこわい顏をしたムーアさん御前はこの着物を持て何にするつもりデスカ人の物を持ち出て、私はモー仕方がない日頃の強情を張てもいかんと思た故白狀と決心した、頭を擧てちやんと云つた、ハイ私はギットの着物をとりましたがそれなればギットの上着とトムのとを私が間違たと見えます私は彼の上着を引裂ふといたしました、なぜなればギットが私の鈕と金の留針をぬすみ取りました故で外に譯はございませんしかし……と跡は十分に云へあない、私は心のうちさつぱり分らない私の取た着物はギットのでなくトムのであればトムの懷中から出た金の留針眞珠の鈕だものギットが盜だとわ云われない、その時先生はトムの着て居た上着を取てギットに着せまた傍ちにありし泥だらけの着物を取てトムに與へた、す

るとギットは私の傍に來て眞珠入の釦と針を丁寧に私の前に置て、先日途中であなたが御落しあすつた故ひろつて置き上けようと思て翌日學校へ持てまいりましたその日に何處えか失ひましたが着物の間違から今また御返し申す事が出來るのは幸です私はあなたに盜賊と云われてもあなたを親愛しますと云はれた其時私は思わず涙、トムは恥かし氣に顔を赤た。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

史傳

○チャーレス、ヂッケンス傳（其二）　ふ、ち、

幼時。　千八百十二年二月二日ランドポートに生る、當時ランドポートハ大陸に雄を奮ひしナポレオンを一擊の下に破らんとする英國海軍の名譽と共に頗る隆んにして氏が父ジョンは海軍主計局の僚屬たり、性眞率正直にしてヂッケンスは自ら熱心に曰ふ「凡そ世界に余の父ほど溫厚篤實のものはあらじ余は今に父が病苦心勞の妻子朋友を遇する擧動の殆んど賛美外にあるを記臆す、現に余が幼少にて病めりし折父は少しの倦勞もなく余を介抱したりき、彼は事を執るに熱心勤勉にして且謹厚嚴肅なりし」。噫、是謹厚勤勉なりし父ジョン、チッケンス即ちウ井ルキンス、ミカウバー（「ダビッド、カッパーフ井ールド」中の人物にして父ジョンを摸せしもの）は家眷を養ふを得ず子息を教ふるを得ず終には少しの財産を差押へられ負債者の牢獄に投ぜんとする迄に苦しめり。

ヂッケンス二歳の時父は倫敦に轉じ僅かに二歳にして再びカザームに轉じ四五年の日を送れり。後年 Household Words 又は All the Year Round に記されしを見れば氏の幼時を充分に知るべし、此記者は甞て虛弱なる愛すべき小童を見たり其童子は不思議にも觀察力に富み殊に記臆力強く他の粗暴なる童子と戲るゝを願はず一室に籠りて一心に英國古文學を研究しトム、ジョーンス及びロデリック、ランドムの如きは殊に愛讀し彼のドンキホーテの冒險は深く其心裏に侵染し且つアラビヤンナイト及鬼物語の如き怪談を涉獵したり、彼は又詩文章を暗記し來客あれば好んで是を誦謳して自らも樂み善良なる父も大に誇れり。九歲の時一家族に伴なはれ再び倫敦に歸りしが退るに難き豺狼共は閾に迫りて中々に追ふ事を得ざしかば家族計りてジョージ町に學校を開きしに一人の來學する者なく百計盡きてジョン、ヂッケンス氏も終に拘引されマーシャルシーの監獄に投ぜられたり。殘りし家族は如何ともするを得ざりし故ジオージ町に殆んどギプシー仝樣の生

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

計をなし小さきチャーレスも折々は獄舍に到りて父を訪ひしが此時より牢屋の光景は腦裏に銘じて後年幾多の作中に是を記する頗る詳らかなりしも爰に胚胎せり。悔しおつて父は放免となりしが斯るほどなれば教育を受けざる代りに些細な家事に役せられ父の長靴を磨き使に走り幼なき弟妹の守をなして碌々たりしが此艱苦こそ後年には悉く氏が資料となりて充分に——少しの心勞もなく氏が著作を益せし事もありき。其後氏が從兄ラマートの家に通勤し少しの給料の爲め終日勞役に從事せしが後に至り氏自ら友人に語りて曰く余が勞役せし時——殊に余の姉が音樂大學校に於て褒賞を得たりし報知ありし時ほど悲しきはなかりし我身を顧みれば姉とは天淵の區別にて余は思はずも不測の涙にむせびたりきと。然るに幾ほどもなくラマートとジョンの間に確執を生じ母はいろ／＼に取成せしが父は少しも取合はずしてチャーレスは家に歸るべし彼は學校に通ふべしと宣言せり、氏が此時の喜びは實に非常にして二十五年間は最愛の妻にも洩さゞりしが終に「彼のハンガーフォード市亡び彼のハンガーフォード階段壞るゝとも余は初めて奴隸に陷りし舊工場に歸るの勇氣なし、余は元より是も余の地位を作りしものとすれば決して慣懣せず殊更其時の母の厚き情は終身忘れず又忘れもせじ又忘るゝ事能はず」と記したり。

氏の父は漸くに氏の才學の賢なるを悟りてウエールス人ジョーンス氏の建てたるウエルリントン、ハウスに入學したりしが教員は無學淺識のみか殘忍慘酷にして弟子を教授するよりは寧ろ支配したりしといふこそ適當なるほどにて生徒中の衆評には教員中のある者は少し計り知り教頭は實に何をも知らずといひヂッケンスも又其說を助け共に採筆して Our School と名付くる一篇を Household Words に投載し生徒が好んで白の二十日鼠を養ひ是に車を引かしめ鼠は其途中のインキ壺に落ち溺れざるも黑色に染まりたる笑ふべきを見て樂しむなどゝ記して隱に教室の不体裁を毀れり、氏は十二歲に此學校に入り十四歲に退學し勉強時は僅かに二年なりしが其後は自立を計り撿事局の書記となり一周に一シルリング六ペンスの給料を取りしが新聞探訪者にならんとて一心に速記術を勉強し半分の事業を爲さゞる氏が格言をもて鋭意黽勵せしかば幾何ならずして氏は忽ち最も熟練ある速記者の一人となり引續きて The True Sun The Mirror 及び Morning Chronicle に雇はれたり。モウコング、クロニクルはブラック氏の管理に屬しフ

井ツグ黨の機關なりしが當時第一改革の熱度盛んにして到る所探訪資料の爲に狂奔せり氏の自ら謂ふ處に依れば雨中に屋外演説を筆記するに傍人の信切を借りて手巾を以て雨滴を防ぎて採筆し又ある時は夜間蠟燭の光を借りて筆錄し蠟燭は滴々として其衣裳に流るゝも厭はず記し了れば直ちに輕車を奔馳して殆んど顛倒する許りに危きを犯して編輯所に歸りし事あり。

罷すぎて氏は傍聽の席にて下院の舊廊下に筆記して膝を磨耗せしを面白く語りて曰く余は此間に知らるゝ車には大抵落されたりし又時には泥濘なる小路に入り車は沒し馬は勞れ馬丁は醉倒して思はずも編輯時を失し最も宏量なるスコット人のブラック氏が呉々も頼まれしを忘るゝにあらねど端なく時間にをくるゝ事もありしト。幾何もなく氏は探訪室の長者となれり、氏が文界に現はるゝの時期は將に來らんとす。

小說

○冷熱記

北邨俠士錄

第二章　閨怨

都の端、人少なく木多き森山と字なする處ろに、宏ろからねども近邊には目立つ家居をしつらへ、木立物ふり、構え幽邃にて、最と奥床しき住ゐあり、門てに松平伯邸と表札打ち・常には人の氣合せぬ迄でに靜かなれど、折々町外れの百性が野菜など持ちて出入するもあり、特に主人なるべし馬に乘りて大方の土曜日、夕方より此に來れば、景色頓かに色づきて最とにぎやかなりと、左れば知らぬものも一目して之を只ならぬ人の別莊などにやと心付くとあらんが、吾れも一二回此に參りたれば能く其趣きを知れり、實に都門熱閙の地を去りて折節の安息場となすには、地勢家居ともに倔強にて、何をも求めず只だ閑居をのみ得たしと思ふ吾には此莊ほど吾が慾情を動かしたるものなし。

即はち此れ松平清方伯の所有に屬し、伯が官暇に來りて讀書遊樂なさるゝ所ろなれば常には留守居めきたる年老ひたる夫婦只二人して守すれども、此夏の初めよりは長女麗子の君此に暑を避けて座はせば、侍女二人つねに之に侍づき、尙ほ奥方藤子の君と申すも、折々は來りて一日二日と留まらるゝともありとぞ。

扨て此の松平伯と云へるは今人も尙ほ多くは記臆すらん、其頃貴族院の副議長にて華族社會錚々の人なりき、夙に英國に

留學し、後ち米國全權公使となりて數年ワシントン府に滯在せられたる程なれば、世に云へる大名風など云へるは些しも見ず、甚たく平民主義を喜こび、好みて民間の有志者に交わり、且つ深く書生を愛して望みあるものには吝しみなく學資を與ふ、而して一家の生計には質素儉約を守り、固たく奢を禁じて貨を有用の費へに貯はへらるれば、家には一疋の馬、二疋の獵犬、一丁の獵銃あり、外には彼別莊一つ、畠數丁ありて、書籍と閑暇とを供ふ、此れのみ主人が樂しみの種となりて、別に所有の馬車手車すらなき程なりし、左れば夫人も亦た能く伯の志を知りて、家計を取締まり、細かに用を節して月々若干の金を殘し、舊藩の書生にて京に留學するものに貧しきあれば、窃かに遣わして之を助け、尚ほ之を勵まし、其勉學を奬められたるよし、余が知れる書生にて其事を自から話したる者もありき。

余も兼てより伯の賢なるを知り、密かに交わりを望みたるが、例の氣風なれば求めて推參する心もなかりしに、友人雲井龍雄深く伯の爲に知られて遂に其長女雁子の君を娶るの約を爲すに至りしかば、其后雲井に伴はれて伯と面談したるに一見舊識の如く、悄すでに熟したれば、之より屢ば往來するとなり、嘗て馬を列べて小金井に櫻を觀たる折り、雲井は花の爛熳として十里一朶の雲の如きを壯んなりとし、彼の象山が櫻林に鉋を試みたる詩を朗詠し、伯は微笑して花有根の長詩を即吟し、余は憮然として落花の賦を作りたるとあり、回想すれば十年昨日の如し、今昔の感胸に切まりて悲し。

面白きとなれば序でに記るし置くべし、雲井が伯に知られたるの初めは恰かも封建時代の物語にさも似たり、夫は何年の頃なりしか雲井が倘ほ書生にてありし時、或夜破帽長策にて東台に月を賞せしに、常時心なき書生等迄で切りに壯士を氣取り、徒らに慷慨して内心に恐れつゝ表面に亂暴を爲せしとありしが、恐らく其仲間にてやあるべし、松平孃が一人の侍女を連れて小西湖の邊りを吟行せらるゝを尾し、何か在るまじきとを仕掛けたるを、雲井遙かに見止め、勃然として憤どほり、怒れる獅子の如くに走せ來りて鞭を揮つて叩き散らせしよし、而して餘憤去らず、濶歩高談して孃等を送り松平家の門前に至り、乍まち飄然として消失せたるが、之を雲井と云ふものなりとは孃すら聞くを得ず、况して松平家に於ては只だ聞たしとのみありて尋ぬべき便りもあらざりしに、其後一年餘り立ち、彼の有名なる條約改正決行中止論の沸騰したる比ろ、松平伯は當時樞密院に於て尤も熱心に決行論を主張すと聞え渡りしかば、決行論者の方にては之を大ひなる賴みとすれども、中止論者は非常に之を惡み、遂に怪しきもの其邸に忍び、夜を徹して窺ふ迄に至りしが當時雲井は慷慨して熱心に愛國盡忠論を唱へ、或は演說し、或は新聞紙に投書して、切りに當日の改正案に反對せり、而して或日突然松平伯を訪ふて面わたり改正案の國家に大害あるとを痛難し、涙を流して諤論したるが、伯は諄々として之に答へ、敢て逆ふ所なく徐ろに之を辨じたれば、凡そ三時間の論難答辨の后ち、雲井は大に悟る所ろあり、之より翻然として改正案に賛成し、輿論に向つて明らかに自己の誤まりしとを表白し、反つて一層の熱心を以て決行論を主張したり、扨て此時前夜の助け手は雲井なりと云へると知れたる上に、雲井が深く伯の遠識に服すると共に、伯は雲井の忠貫剛俊にして有爲の才あるを愛

し、之より屢ば雲井を招くに、雲井は反つて之に應ぜず、其遂に議員となるに及び、彼の貴族院衆議院大討論の日、彌よ伯に服して遂に之と親交するに至りしなり、蓋し雲井は極めて自由主義を守るものなれば、平生貴族を見るに少しく度に過たるの癖見わり、只だ何んとなく之を嫌ふは宜しからずと余も屢ば忠告したるが、然れども雲井に於て此の癖あるは反つて亦た雲井の雲井たる所ならんと考へしともある也。

雲井すでに松平家に如此き縁あれば、彼の退去の命出でし翌日余が高島山より歸りて妻に聞けば、妻の許に麗子孃より彼が事に付ての問合せありしよし、其問合せの書狀によれば、雲井は二ケ月前より絶へて松平家に往來せず、偶たま孃に音信するときも甚はだ冷淡なる文字を以てし、何やらん頗ぶる掛念せらるゝに、退去せられたる人の中に雲井の名こそ見えざれ、其友人にして之に加わりしもの甚はだ多きに、況んや彼が平生の激し易き氣質に於ては、己れより特更に出でゝ加わらんとするともなきにしもあらず、然るに斯る時は彼れ常に一言も其の安否を知らせざる風なれば、尚ほ一層に案じらる、只だ余の許にのみ何事も打語らるゝと聞つれば、此等の事細かに聞合せて知らせ呉れとの趣きなるよし、孃は平生わが妻を姉の如く思ひ、心中万事打洩して秘す所ろなければ、此の手紙には定めし悲しき辭ば多かりしならん、妻は之を見せんと云つれど、余は左樣なる書は他見すまじきものと戒しめ見ざりしが、妻が口ずさむを聞けば、

わがつまの情けうけずと笑わなん
きみならずして誰に問ふべき。

など云へる歌もありしよし、孃が心中思ひやらる、雲井は決して愛に溺き男ならず、寧ろ余れよりも熱情の質にてわれど、未だ婚せざる婦人は他人の如しと云ふ論法にて、兎角西洋風の約束論を退ぞけ、毎度余を罵りたるとあり、余は彼が彌よ癖論するを聞て、寧ろいよ〳〵彼を愛したり。

固より余は高島山にて見聞したるとに付き甚はだ憂ふる所ろあれど、其は未だ確しかならぬとゆへ、妻に語り聞かせず、思ふに孃は今ま彼の別莊にて獨り切りに案じてや坐わさん、特に此の明月は前年東台の下に於て孃が初めて雲井を見たる折りの明月に異ならず、月盈蝕あれども万古變らず、而して人世の浮沈定まりなき何んぞ浮雲に似たる、孃が歎き益々切なるべしと推せらる、左れど雲井には大方事あらざるべし其由を認ためて早く慰さめ玉へと妻に語りぬ。

闢書

○藤の屋の大人に參らす

思案外史

酷署の砌益御壯健筆硯に從事被致候段大賀の至に御座候陳ぞ拙者事先頃中より箱根地方へ漫遊仕り昨夜歸京の上拙著乙女心の御批評忝なく拜讀仕候いつもながら綿密なる御批評誠に嬉れしく拜見仕候決して世間並にお世辭を申上候譯には毛頭無之候へ共今迄乙女心に向つては隨分とも澤山の批評も有之候らひしが大人の御批評の如く公平に緻密に嚴正に且愉快なるは一つも見當らす候處不圖御批評に接し拙者胸中の滿悦御高察被下度候附ては今更御批評に對し四の五の申上候も所謂恥の上塗とやら、なさずもがなの事には候へども聊か御禮の印までに左に愚見晷記仕候まゝ御見捨なく御一讀被下候へば幸甚の至に御座候

初めの「縁なき趣向は褒めがたし」の金玉のお洒落難有受納仕候（藤の屋先生にしては大……杯申す惡口は決して不申候）拙者も一つ「縁なき批評はけなしがたし」さ云ふ事列ね候はゞ又候＝是では塊口さなつて申さば猿眞似＝さのお叱言も候はんか作者日の「雖だ」は誠に重々恐入候發刊前社中にても＝どうだい思案、いつろ作者日の「なんだ」は「雖だ」にしては＝杯の助言も有之候ひしが今大人の御文言さ圖らず符合致し今更の樣に恥入申候

此外御批評一々御尤の御攻擊にて手も足も出されず只々器械の豚の子を羨ましく恨めしく思ふのみ何んさ負け惜みも申されず候へども外題を「乙女及び學士」とさせよさの御言葉はチト承諾仕兼候何も主人公を其儘外題に、イヤサ主人公は必ず外題に入れねばならぬと申す小說外題條例は何時頃の發布に係り居り候や御序の節御報知願上候

殊に御許に感じ入り候は赤飯の御講義に御座候御存知の如く拙者元より貴公子には無御座候へども赤飯が前晩より用意不致候ては出來否蒸されぬ物とは御許にて初めて承知仕り例のウッケ者今迄は氣が附き不申天晴一廉の智識を得しもの哉と厚く御禮申上候

其他江戸地理學、年月の相違等一々御指摘被下御厚情の段感謝の外は無御座一々奉恐入候

三回の「雪子の夢話」は國民之友にて福州先生も痛く攻擊せられ乙女が母の面前にて惚氣が……と一概に云はれたれ共拙者の愚考にてはかゝる事は隨分世間にも有之未來の夫―最愛の夫を想ふの餘り思はず可憐の口元を溢れ出て候は却て乙女の眞情を穿ち候積、此處を見てくれねば……さちだんだ踏んでも讀者かさう思つてくれねばなんにもならず泣寢入の外は無之候へ共御最負甲斐に此儀だけは御再考被下度くれぐれも願上候

此外一々申上候は恥を一々重ね候樣のものに御座候まゝ態と差扣へ申候併し結末の「玉石の文字」玉とはまがひの明石玉か、石とは砂利石かに候へば宜敷候へ共只玉石とかゝれ候ては或は貴重途方もない玉石と讀者が邪推致候ては折角の御冷評も無になり候へんかさ今更お恨申上候此外申上たき事は山々海々有之候へ共時節柄御迷惑さ存じ茲に惜しき筆さめ乍大延引御禮かたがた如此御座候草々頓首

八月十一日　思案拜

藤の屋樣

御許へ

內々の事はとまれ文壇へ押出してはさ遠慮會釋なく駁評を加たるにわざわざ御書を惠まれしは御念の入りし御事にてわれらもうれしふ存じ候。御文中にて「折角の御冷評」とあるは一向に心得がたくわれらゆめゆめ冷評せし事無之候。第三回のゆめ話なるほど繰返して見るとどうして中々……謹んで疎忽を謝す。玉石の文字の御講釋チト違ひたる樣なりわれらは心から底からおほめ申したるに。

外題條例追て貴意得申すべし、まづは御返事まであらあら。　藤の屋

新報

○國際結婚論

神洲の實血に夷狄の血を混ずるは、是れ神洲を瀆がす也、天照大神以來帝統一貫、未た嘗て實緣を破りたるものなし、たとひ現今內外對等の國際を爲すさ云へども、神洲の氣自づから異なる所ろあり、安んぞ綠眼紅毛の國を以て同班に置ん、況んや其の民出先祖の帝王を以て吾が二千五百年來天命を負ふの至聖に比するを得んやさは定めし保守論者の慨慨する所ろなるべし、吾人經濟記者が「國際結婚論」を讀みて左樣なる慨慨は出です、然れども不幸にして亦同記者が自から之を名論卓說なりと信ぜらるゝほどに信ずる能はず、實は最早承はる迄もなき明白普通の事なりさ信じたり。　但し國際結婚を利益ありさするの論證に、「如此なれば外賊の禍を蒙むることなく爲に國政甚はだ平安なるを得ん」と云ふに至つては、開化小史の著者千慮の一失なりさ爲さゞる可らず、今や國々相對峙するの點より觀察すれ

ば又た一封建に過ぎず、故に外國の王を以て日本の帝室に嫁せしむるときは、外國の王家亦た吾が一外戚に過ぎず、若くも今日に於て尙ほ外戚の患を憂ふべしとせば、特更らに蕭條冷寒なる外國に於て外戚を作るは更らに一層の憂ひにあらずや。然りと云へども、今日は最早漢の天下に非ず、既に代議政を布くの日に於て安んぞ外戚を憂ひん、國會未だ開けずと云へども請ふ先づ現今の日本を見よ、今に於て外戚に憂ふるは殆んど杞憂にあらずや。故に外戚の禍なかるべしとして國際結婚を主張するは、夢利を想ふにあり、預算違ふときは必らず失望の日あらん記者乞ふ之を棄てよ。然りと云へども、保守論者の長夢を醒まし、内外の隔心を破り、人類の博愛を固むるに於ては國際結婚甚だ効あり、記者が論唱する所ろ實に益なきに非る也。

○女流の建白

條約改正は皇國の大事なり我等二千萬の姉妹豈に默々にして止むべけんやとの主意にて、大坂の松永芝香女史は一片の建白書を其筋へ差出さんと盡力中のよし聞ゆ。凡そ一國の大事なるを以て女流亦た身を挺して盡力すと云ふ頗ぶる可なり、吾人亦た甚はだ之に贊成す、然れども凡そ如此き事に奔走するに當りては先づ篤と利害正否を考へて深く討査する所ろなかる可らず、萬一にも只だ騒がんが爲に騒ぎ、もしくは只だ一種の影役者に使はるゝ如きとあらば、啻に世の物笑ひとなるのみならず實に女權大傷損の元なり、昔は奥女中御殿の奥より勝手に老中を揮はせたり、今若し女流閨門外に奔走して内よりアヤドルものゝ手に使はるゝとあらば女流の運動の目立ち來るは抑々女權の進みたるものか、果して退がきたるものか、先づ深く考へざる可らず。

○一夫一婦制建白

一夫一婦制の事に關する建白は尙ほ續々起らんとす。景山英女史は此頃ろ京都同志者の建白書を提さげて上京せられたるが、今亦石川縣金澤市に於ては、去月二十九日其縣廳を經由して同主旨の建白書を差出したるに、連署調印したるもの八十七名、内男四十四名、女四十三名、信徒七十名、未信徒十七名ありし由也。

○關西教育協會

去月大日本教育會の總會あり、文部大臣の演說、各部門問題の討論、會員の欠席退會等に付きて彼此論するものを諸新聞雜誌上に見來る折柄、去る六日午前八時第三第四第五學區の教育有志者四百五十名、大坂尋常中學校に集まり、氷柱溶り、清水灑ぎ、紅燈星の如く散じ、狼火花の如く開き、奏樂朗々、涼船汎々たるの内に於て恙なく關西教育協會設立の議決成れり。凡そ教育は器械的、保護的、虛飾的によりて成立するものにあらず、願くは東西の兩教育會なるべく能く其任を盡し、切に眞正純厚の學風を起し來らんことを。

○濟々黌女子部

去る五月宏大なる裁縫場を新設し、今春來生徒組合ひにて養蠶に從事し、實業的の女學ますく盛んなるよし、蓋しスパルタ風の人才は不用なれども其の氣象に至りては今や甚だ入用なり、濟々黌女子部の如き亦た凜貞礎操の女學生を出すに適するもの也、希はくは彌よ盡力せよ。

○現今日本國中の諸禁酒會

爰に吾人が調査して揭載したるのち更に增加する所ろあり、今ま「光」第二號によりて全國の諸禁酒會を合計するに實に五十四あり、其國別及會名左の如しと云ふ、

大日本丁友會（東京）。橫濱禁酒會。北海禁酒會（札幌）。高遠禁酒會（信濃）。馬頭禁酒會（下野）。防長禁酒矯風會（山口）。反省會（京都）。京都禁酒會。大分禁酒會。宇和島禁酒會（伊豫）。三島禁酒會（伊豫）。上毛禁酒會（上野）。高知禁酒同盟會。村山禁酒會（羽前）。北羽禁酒會（秋田）。熊谷禁酒會（埼玉）。諏訪禁酒會（長野）。日本禁酒會（福島）。高田禁酒會（越後）。日東禁酒會（陸前）。椴法華村禁酒會（石狩）。奥尻島禁酒會（北海道）。岩手禁酒會。赤十字社（新潟）。吉田禁酒會（伊豫）。禁酒進德會（佐賀）。幼年矯風禁酒會（橫濱）。岩國幼年共勵會（周防）。伊那禁酒會（信州）。岸和田女子禁酒會（和泉）。京都婦人禁酒會。大坂婦人禁酒會。長崎婦人禁酒會。婦人矯風會（東京）。武相矯風會（神奈川）。函館婦人矯風會（渡島）。盛岡婦人矯風會（陸中）。高梁矯風會（備中）。松本婦人矯風會（信州）。秋田婦人矯風會。風俗矯正會（高知）。今市矯風會（嶋根）。長柄禁酒會（上總）。柞原矯風會（備後）。岡山婦人禁酒會。神戸婦人禁酒會。秩父婦人矯風會。靜岡婦人矯風會。小室婦人矯風會。上田女友會。松代婦人矯風會。鹿角婦人會（陸奥）。飯田禁酒會。帝國禁酒會關東部（北總禁酒會改名）。

○女子の眞勇

近頃ろ米國ジョンストーンに慘烈なる大洪水あり、此時女流にして驚世の働らきを爲したるもの多かる中に、ナグル夫人と云へるはコーンマウ谷の電信技手なりしが、洪溢近づくとの電報に接して直ちに局机に向ひ四方に警報を發したるが、大水漸次に來りて水屋中に溢たれば、初は二階に登り、次に三階に登り、屋中上下悉とく水となるに尙ほ四方に電報したり、故に遠方の友人大に掛念し、電音して須からく女史先づ自から救ふべしと申來りたるに、女史直ちに報電し、妾が一命は他に逃るゝよりも此處ろに於て益を爲し得べしと答へたり、斯て水全く溢れ將に死せんとす、則ち哀手を以て打ち「此れ吾が最後の電報なりと」と報じたり」。クラ、バートン女史老後病餘に亦た非常に盡力し、數多の救濟を爲したり、サムマー新聞之を評して曰く、女史は政治家の才能、將校の指令、女性の心及手を有せりと。

○教授ミッチエル女史逝く

米國著名の天文學者マリア、ミッチエル女史は去六月二十八日死す、齡七十一才。女史少きより父ミッチエル氏の天文學研究に助力し、其傍らに侍して天躰の觀測に從事し、二十八才にして一慧星を發見し、之より以前十六年に於てデムマーク

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

王が懸賞したる天文發明賞與の金牌を受けたり、四十八才即はち一千八百六十五年バッサル女子大學の創立せられたるより以來二十二年間同校の天文學教授と爲り、書生を感化したるを甚はだ著じるし、三つの大學よりドクトル、ナフ、ロウス（大博士）の學位を受け、前年米國に於て開かれ今はウイラード嬢が會頭と爲り居る女子大會の會頭と爲りたるとあり。教授イリー、ホイトテー女史、ミッチエル女史逝去の時演述して曰く、古來天文學に於て著名なる女流少なからず、即はち手と眼とを以て著名なりしリロリン、ハーシエル女史より、考と筆とを以て有名なりしイリー、ソイービルに至る迄で、凡て實際理論の二つに於て女流亦共に能く卓越するを得るを証したり、現今十九世紀天文學史の著者たるアグ子ス、クラーク女史亦た名あり、其他スミス、バッサル、アルスレー等の女子大學皆な天文臺を備え、其天文測量には皆な女學士之を總轄し、スワースモーア男女共學大學に於ては女流の手にて管理する天文臺あり、ノースフヒールドのリールトン大學には其天文臺に女子の補助手を置けり云々。

○獨逸國女學

大日本教育雜誌去十日發の分に、在獨逸某學士の通信を掲ぐ、甚はだ有益確實なりと思はるゝに付、其中ち女學に關する二件を左に抄出すべし、

女子大學教育の事　コエニヒスベルヒ大學に教授たるデヒオ氏は大學の講堂を開き初めて婦人世界をして第十九世紀開化史を聽聞せしむ嗚呼彼の千八百五十四年十月一日二日三日の指令を草して普國に公布したるスチール及ラウメル能く地下に此事を聞かば意に慊する無るべし。婦女教育に付近時尤も人心を動かしたるハ議官ドクトル、シユナイデル氏の演述也別けて此般の演述は忽然出でゝ忽然模範となるものなれば輕視すべき者にあらず演述中格別の章を問へば妙齡婦女教授の時之に與ふるに光榮ある位置を以てすべきは必然なりと云ふもの是也。

文部大臣意見　コエルンに於て獨逸國別けて普國の高等女學校々長教官女教師總集會ありしのち此等教官は大學出の教官と同等同階ならんとを希望し文部大臣フオン、ゴッスレル君に請求又は懇望したるにぞ大臣其意見を陳へて曰く婦人に與ふるに公立高等女學校中、上級教授の任を以てし可及的其版圖をして廣大ならしめんとするは文部省の素より望む所ろなれば今に至る迄爲す所ろとして恭さゞるはなし而して更に益を與へんは本官の克くする所ろに非ざる也千八百七十四年四月二十四日の試驗規則に據れる高等女學校女教師試驗に及第したるものは同學校上級の教授を爲すの權及實力ある証をも合せ得たるものなりと而して將來監督官よりして未曾て一女教師に關して上級教授上不都合ありと本官に告るものあらず……爰に最近調査に依れば九箇の國立女子師範學校に於て每週二百十九時間女教師の手に屬せり普國全高等女學校上級に於ては去冬每週一萬千三百十九の學問時中其四千百十一時間餘は女教師の與ふる所ろなり國財補助私立女學校に在りては三千二百八十四學問時中の二千七百三十九を女教師授けり此に由りて觀れば上級教授の任を帶ると甚だ高しと云ふべし獨りベルリンの公立高等女學校及他二三の大都に設立の者を例外とす……年若の女教師にして其智度を高め其學識を廣めんとして補助を須へるものあり此れ本官の甚んで諾する處ろなり即はち其結構なきに非ず亦女教師の學植をして更に重らしめん爲め啻に手藝の諸科のみならず又文學に於ても國財を以て益々獎勵を怠たらざるべし而して豫定費高の許す限り其區域を擴張せん……在來の女子師範學校に對して彼のニユーホーム及ジヤートン、コルレジを模範とし一個他種の大學校を起さんとする建議は斷じて本官の退くる所なり。

外報

○米國土人　南米の土人中にも女子教育漸次に盛んとなる即はちフハンニー、ジヤクメン、コッピン嬢はフヒラデルフヒアは土人教育の職業學校を設立せんとて資金を募集し。マツハー、アンデルソン嬢はフランクフホルトに一女學校を管理し近來土人教育に必要なる教師造成ニ盡力し、モンロウ夫人はサバンナーに土人の學校を設け之をシンモンス、アカデミーと稱し既に一百人の書生を得たり。

○女大學長　去三月マウントホリヨーク女大學の校長に撰ばれたるよし記したるメレー、ブリグハム女史は六月末土曜日ニウヘブンにて死したり、女史は曾てエルスレー大學の校長たりし有名の女學士なり。

新報

○閑院典侍の御懷妊　權典侍園祥子の方にハ此程より御懷姙の操に承り居りしが本月ハ姙娠後最早三月目のよし。

○共立女子職業學校　一ッ橋通町なる共立女子職業學校にてハ去月十五日より本月三日迄定期試驗を行ひしが其の卒業生人員ハ左の如し

裁縫科甲科十四人乙科九人○編物科甲科六人乙科二人○刺繡科甲科七人乙科六人○造花科乙科六人○圖畫科甲科三人乙科四人

又同校ハ暑中と雖も休暇なく日ゝ授業するよしなり。

○內外人結婚屆　芝區明舟町に寄留の岐阜縣士族小倉庄太郎氏ハ今度獨逸國人マリヤ、ニッチエスト女と結婚致したき旨昨日其筋へ屆出でたり。

○結婚　靜岡に居らるゝ德川慶喜公の二女本年十四歲の姬君にハ此度德川達道氏（元一橋）と結婚の約整ひ近ゝ吉辰を卜して輿入に相成る由。

○婦人會雜誌　高知婦人會に於て一の雜誌を發兌せんとの計畫ある由は兼て聞き居たる所なるが全雜誌は今度愈々發行する事に內決なし目下頻りに其準備中なりと。

○女生應募者の注意　宮城尋常師範學校に於て今回募集さるゝ女子部入學生の事に關しその筋の見込を聞くに一昧何れの學校にても初年は至つて寬裕の風あると なるが今回募集さるゝ女子部の入學試驗は全く之と反對にて餘程高尙嚴格を主とさるゝ趣なれば應募者は充分の用意ありたきものなり。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

看病婦學校生徒募集廣告

●本校學年ハ明治二十二年十月七日ヨリ同二十三年六月下旬ヲ以テ終ル●第一期ノ始ニ有ラザレバ入學ヲ許サズ故ニ九月一日迄ニ必ズ申込ヲ爲ス可シ●教授法ハ講義口授臨床講義等看病ノ爲メ必用ノ事ハ洩レナク教授ス●毎月食費金貳圓ノ外要セズ但シ炭油部屋教科書病室用服等總テ本校ヨリ給ス●學則校則入學志願手續書等望ノ方ヘハ相渡ス可シ若郵便ニテ申込アラバ直ニ送附ス

京都烏丸通　京都看病婦學校

公證人子爵新莊直陳片校補
中川浩　長谷川芳藏　兩君著述

實用問答　**公正證書囑託人便覽**　完

正價六錢　郵税二錢

抑モ公正證書ハ完全ノ證據力アレハ苟クモ財產ヲ保護シ契約ヲ鞏固ニシ後日ノ紛議ヲ防止セントスルモノハ萬般ノ契約ヲ公正證書トナスノ得策ナルヿハ喋々ヲ俟タサル所ナリト雖モ公證人規則ハ我國ノ創設ニ係ルヲ以テ或ハ其効用ヲ明解セサルモノアランヿ著者茲ニ感アリ何人ニモ解シ易キヲ旨トシ叮嚀懇切ニ縷述シ又參考ノ欄ヲ設ケ後見人及ヒ本人相續人等證明願ノ書式ヲ示シ證劵印税規則及ヒ登記法中ノ要目ヲ掲ケアレハ結約者必須ノ良書ナリ

本多錦吉郎著　文部省檢定濟

○**小學畫手本**　全十四册

定價一册ニ付　自一至七　各三錢五厘宛　自八至十四　各四錢

此書ハ運筆堅固明瞭ヲ主トシ線條ヲシテ韻致アラシメ且ツ價極メテ廉ニシテ學校教科書ニハ尤モ適切ナル書ナリ

東京神田雉子町三十二番地

發行所　團々社書店

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ爲六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルベシ

當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尚完全ナル教育ヲ授ケンカ爲メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歷史心理學教育學等ヲ教授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユベシ此改正ハ文部省教員學力檢定試驗ヲ受ケ教員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニメ甚好都合ナルベシ

所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡鳥ノ科ヲ設クヘシ

且教師ヲ增加シテ充分適當ナル教員ヲ持續センヿヲ勤ムベシ

又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ

現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年六月

麻布東鳥居坂町十四番地

東洋英和女學校

社員ヲ募集シ　**新日本**　ヲ刊行セントス詳細ノ規則ハ郵劵送附次第速ニ御覽ニ入候

東京本鄉天神町壹丁目寓

畝下熊野

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ申込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵劵二錢ニテ送付ス

明治二十二年七月

京都市今出川通寺町西入

同志社女學校

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

私立 明治女學校 新入生徒 募集

本學年試驗相畢り本科卒業生一名漢學科卒業生七名有之候○右に付最下級及び欠員ある級に對し新入生徒を募集す○規則書塾舍心得書入用の方は郵劵二錢封入申込あらん事を請ふ

私立 明治女學校 高等科 自由科 新設

本校開始後既に五年定めの如く第一回本科卒業生を得たるに付兼て預告したる如く今後新に高等科を設け且つ別に自由科を添ゆ○高等科一日二時間授業三年にして科目及受持講師大畧如左

- 日本歴史、心理學、倫理學　植村正久
- 歐米古今代史　米國技藝士 木村熊二
- 生物學　米國理學士 内村鑑三
- 理化大文學　理學士 木村駿吉
- 經濟學　金谷昭
- 英文學　未定
- 社會學　嶋田三郎
- 支那歴史、日本文學、教育學（未確定）　巖本善治

之を正科とし別に自由科を置き哲學、數學、獨逸語學、比較宗教學、家政學、音樂、書學、を教授し望の者に自由受業せしめ且つ撰科生には右正科別科の内三四を撰み學ぶ事を得せしむ

右高等科有志の諸君は八月二十五日迄に申込あるべし凡そ本校普通科五年修業の學力に相當するものは十九名に至る迄で入校を許す

私立 明治女學校 文藝講話 預告

次學年の秋を以て始め時々文學々術上の大家に請ふて數回連續の講話會を開き廣く來聽を許して少さか文藝女學の普及に一助せんと欲す

東京飯田町三丁目卅二番地
九段坂上燈臺屹立する所ろ

私立 明治女學校

發兌

八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	
十月。	五日	十二日	十九日	廿六日	
十一月。	二日	九日	十六日	廿三日	

定價

一冊。六錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十冊。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行一回（廿七字詰）前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six months, *yen* 3,12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町巖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社○同支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○横濱住吉町角田尾貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年八月十五日印刷
明治二十二年八月十七日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

昭和四十二年二月十日印刷
昭和四十二年二月二十日発行
（第二回）第百六十号〜第三百四十一号（甲）
全五百四十八冊 頒価 十万円

複製版「女学雑誌」

発行者 京都市左京区今出川通加茂大橋東入 武井一雄
オフセット印刷者 明文堂印刷所
製本者 新生製本株式会社
製帙者 安井製本所

発行所 京都市左京局区内今出川通加茂大橋東入
株式会社 臨川書店
電話 京都 78―六一六六（代表）

装幀 寿岳文章

（第二回配本）

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES

This book is due on the date indicated below, or at the expiration of a definite period after the date of borrowing, as provided by the library rules or by special arrangement with the Librarian in charge.

DATE BORROWED	DATE DUE	DATE BORROWED	DATE DUE
	FEB 03 1994		
JAN 19 REC'D			
APR 27 2000			
SEP 20 2001			

C28 (167) 50M

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES
0037413724

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

COLUMBIA LIBRARIES OFFSITE
CU05739365

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY